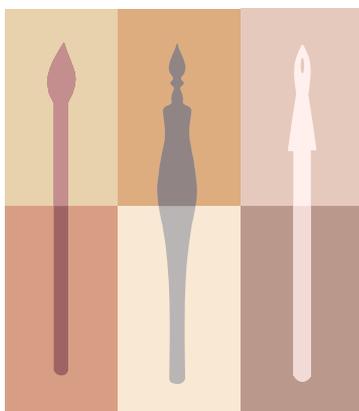


ニューイングランド大学生

日本語

エッセイ・コンテスト 2008

「日本に学ぶ」



Japanese Language Essay Contest for
New England College Students

Sponsored by the
Consulate General of Japan in Boston

ニューイングランド大学生日本語エッセイ・コンテストは、今回で二回目となります。前回に引き続き、ニューイングランド地域で日本語を学習する大学生に、日頃の学習成果の発表の場を提供するとともに、これら日本語学習者に、日本についてより一層知っていただくことを目的として実施いたしました。

今回は、マサチューセッツ州、メイン州等七大学からの参加を得ました。今回のテーマは、「日本に学ぶ」というものでしたが、参加者のエッセイはいずれも、自らの日本との関わりや体験、日頃考えていることを表現するユニークな内容で、前回にも増して、レベルの高い作品が集まったという印象を受けました。前回に引き続き、日本語学習歴三年以下の中級レベルと四年以上の上級レベルの二カテゴリーに分け審査を行っておりますが、いずれのカテゴリーも、上位入賞作品はいずれもレベルが高く、甲乙付けがたいものでした。

これら入賞作品を顕彰するとともに、本エッセイ・コンテストにつき日本語教育関係者や市民の方々にも知っていただきたく、今回も入賞作品集として本小冊子を作成しました。この小冊子が日本語学習者の刺激となり、次回のエッセイ・コンテストにはより多くの参加者が得られることを期待したいと思います。

二〇〇八年三月

在ボストン日本国総領事

鈴木庸一

審査員

小谷野太郎 ハーバード大学日米関係プログラム・アソシエーツ（読売新聞社）

桂子セイヤー 元ピーボディ・エセックス博物館東洋部助手

墨 とも江 講談社アメリカ・プロジェクト・コーディネーター

森田喜代子 タフツ大学日本学科、日本語講師

進藤 康治 在ボストン日本国総領事館広報文化担当領事

謝意

講談社アメリカより本エッセイ・コンテスト入賞者への副賞として書籍を寄贈いただきました。ここに改めて御礼申し上げます。

入賞者 Award Winners

上級レベル Advanced Division

一位 1st Place

ウェン・シー
Wen Si

タフツ大学
Tufts University

二位 2nd Place

マチュー・サバス
Matthew Savas

ベイツ大学
Bates College

三位 3rd Place

ジム・ホイットリッジ
Jim Whitlege

ウィリアム大学
William College

中級レベル Intermediate Division

一位 1st Place

ニーダ・サングリムスワン
Nida Sanglimsuwan

マウント・ホーリーオーク大学
Mount Holyoke College

二位 2nd Place

アシュリー・ハル
Ashley Haru

ベイツ大学
Bates College

三位 3rd Place

カイラ・ミン・キョン・キム
Kayla Min Kyoung Kim

ウエルスリー大学
Wellesley College

上級レベル一位

「一輪車」

ウエンディー・シー

1995年8月24日。それは私が初めて日本を見た日。まだ小さくて何も知らなかった私はお母さんの手をしっかりと握って新しい家に向かった。日本はどんな国なのか、日本語を上手に話せるようになるのか、怖くて不安だった。でも私は一人ぼっちではなかった。初めて日本の幼稚園に行った日は泣いている私に「大丈夫だよ。一緒に遊ぼう」と皆が優しく支えてくれた。寒い日や天気が悪い日は園長先生が車で送ってくれた。私の周りにはいつも優しく見守ってくれる人がいた。

皆のお陰で私は日本が大好きになった。日本語も驚くほど早く話せるようになった。でも一番印象に残っている日本の思い出は一輪車だ。日本に来てから3ヶ月たった頃、近所の優しいおばさんから赤い一輪車をもらった。しかし、この一輪車はただの乗り物ではなく、私に勇気を与える力となった。その頃私は恥ずかしがりやで近所の友達

と遊ぶのが苦手だった。私は日本人じゃないし日本語が上手に話せないからきつと遊んでくれないと思った。でも一輪車を習い始めた時から全部変わった。他の子達も一輪車に乗り始め、私達は毎日一緒に練習した。ご飯を一緒に食べたり誰かの家でお泊りもした。私は皆からたくさん日本の事を習った。そして皆には中国の文化を色々教えてあげた。こうして私は知らない内に新しい友達と仲が良くなり、自然に仲間の一人として自分の立場ができた感じがした。私が中国人でも皆はちゃんと認めてくれた。考えてみると、そんなことは最初から関係なかったと思う。自信がなくて皆を疑っていた私が逆に恥ずかしかった。

私は日本で一輪車を通して一番大切な事を学んだ。それは人と人の絆だ。日本にいる間にたくさんのお親切な人に出会えた。皆との絆は私がどこに行っても消えない。そして皆と作った思い出は何よりも強く心に残っている。

上級レベル二位

マシユー・サヴァス

去年留学生として京都へ行く前、私が初めてのものを食べてみる機会は少なかつた。私の食事はパスタやチーズなど母が作ってくれる西洋料理に制限されていたからである。しかしホストファミリーと住んでいる間に、私の食べ物は変わり、その楽しみ方も分かつてきた。

最初はみそ汁を飲むのも難題だった。また、初めて朝ご飯に魚が出た時には泣きそうになり、私のシリアルはどこかということしか考えられなかつた。それに箸の使い方が下手だったから、骨が取れなく、飲み込んでしまったことがよくあつた。そして毎晩のようにお母さんが作ったタコとキュウリのサラダはすっぱくてたまらなかつたので、縮み上がり、食べる度に目を閉じた。その頃は和食が本当に嫌いだった。

しかし私は、異文化を尊敬するものと思つたので、ホストのお母さんが作ってくれる料理も買ってくれる物も食べてみる義務があると感じ、頑張つて食べた。毎日食べるにつれて、徐々に和

食に慣れるようになり、いつの間にか私の周りの料理を何でも食べてみたいと思うようになった。

そしてある日、広島で、色々見知らぬものにまみれていたお好み焼きを食べた。大阪では次の一口を食べるのが怖いほど辛い韓国料理を食べた。ある夜、京都の街を歩きながら露店で買ったタコ焼きも食べた。そしてある時、まだ生きているウナギが切り開かれているのを見て「おいしそう！」という思いがけない感情が出てきた。さすがの私も日本人のようになってきたのだ。

冬休みにタイへ行った時、一番訪ねたい所はバンコクの公設市場で、そこでこれまでの生涯で一番美味しいカレーを食べた。ベトナム旅行では、見つけられるあるゆる種類のフオを喜んで食べた。

日本に住んで和食を食べなかつたら、この大変美味な経験はできなかつたはずだ。それに、このおかげで私の食生活はよい方に変わつた。今、日本食を作るのも大好きだ。だから、私は日本に深く感謝している。

上級レベル三位

ジム ウィットレッジ

私は日本で勉強している時に、日本にも自然が残されているが、アメリカほどではないという印象を受けた。日本では公害の問題があるし、町がたくさんあるし、狭いから自然が少なくなっているように見えた。アメリカ人にそう言ったら「日本人はあまり自然の事を大事にしていないね」と言われ、アメリカ人のほうが自然の環境を守りたいと思っていると思われるだろう。でも実は反対なのではないか。

アメリカではとても広いにもかかわらず美しい場所も生き残っている珍しい動物も少しづつなくなってきた。昔から人間が環境を壊したり少ない動物を殺したり公害を作ったりしているためだ。日本でも同じ状況だが、日本人は自分の国の環境問題に気がついていて直そうとしていると思う。一つの例は日本のリサイクル制度だ。日本でホストファミリーがゴミを環境にいいように捨てるのを見てびっくりした。日本人は無駄遣いのないようにゴミを減らし、捨てる時は

きちんと分別して、環境を守ろうとしている。見習うべきだと思う。

日本はアメリカより早く環境を守る必要があることに気が付いたので、アメリカより上手に環境問題に直面しているようだ。日本には自然を残せる土地が少ないし、昔から日本人は自然の物は大事にしななければならないという考え方を持っている。アメリカ人より自然界に感謝の気持ちを持つていると思う。日本人は自然がないような所に住んでいても庭などの形で自然のようなものを作って楽しむ。アメリカ人もこういう自然に感謝して守りたいという考え方を取り入れる必要がある。そうしなければ、アメリカはとも広いのに自然がない国になってしまうと思う。

中級レベル一位

「あやまる」文化に学ぶ

ニダ サングリムスワン

ある日、日本語の先生が私に面白い新聞記事を見つけてくれた。その記事は私の一番好きな歌手の赤西仁というアイドルのことについて書いてあった。赤西仁は六ヶ月前にアメリカ留学し、日本へ帰ってきたばかりだった。その記事の中に赤西は「自分の行動で、みんなを混乱させてしまつてすみませんでした」とあやまっていた。この記事を読んだ時、どうして彼が謝らなければならぬいかなど不思議に思った。それから、日本の「あやまる文化」に興味を持つようになった。

アメリカと日本の文化はずいぶん違う。その一つは、アメリカ人より日本人の方がよくあやまることだ。例えば、有名人の場合、アメリカでは何をしても、あやまらないのが普通だ。日本では、あやまらないと、いけないらしいが、アメリカの有名人が同じようなことをしたら、あやまる必要なんかないと思うアメリカ人が多いのではないだろうか。もしかしたら日本社会では他の人にか

かる迷惑に責任を取ることを求められるのかもしれない。

それは日本語の会話にもよく表われていると思う。例えば、日本語では人に何か頼む時には、「ありがとう」ではなく「すみません」と言う。なぜなら、頼まれた人は自分のために何かをしてくれるから、「ありがとう」と「迷惑をかけて、ごめんなさい」と言う二つの意味で「すみません」と言うのだろう。面白いのは、たいてい「すみません」は英語で「Excuse me」と訳されて、普通は「Thank you」とは訳されないから、日本語を勉強しているアメリカ人にはこの概念が分からなくて、困ってしまう。

逆に日本人が英語で「Thank you」の代わりに「I'm sorry」と言ったら、アメリカ人はちよつと面食らうだろうが、アメリカ人もその理由を考えたら分かるのではないだろうか。私は「ありがとう」しか言わない文化より他の人のことを考えて「すみません」とも言う日本文化には学ぶ点がたくさんあると思う。九月から日本で学ぶことを楽しみにしている。

中級レベル二位

アシュレイ・ハル

私はベイツ大学の日本プログラムで秋学期に金沢で勉強しました。日本に行く前、私は人生についての考えがどう変わるか分かりませんでした。しかし日本のホストファミリーと住んでから、私の家族についての考えが変わりました。

私の家族はずっとアメリカに住んでいます。けれどもアメリカは本当に広くて大きいので、父みたいに、家族が遠い場所に住んでいると、あまり会えません。だから私は、家族はあまり大切ではないかもしれないと思っていました。初めホストファミリーと住むことにちよつと緊張しました。

私のホストファミリーは大家族でした。お母さんとお父さんと娘さんと娘さんの連れあひとその子ども四人が、一緒に住んでいました。あとの家族が住んでいる所もとても近かったです。みんながよくホストファミリーの家に集まって来て、いっしょに遊びました。そしていつも私を娘みたいに扱ってくれました。例えば私が悲しい

時、お母さんはいつも話しやすかったです。お母さんは、何か困った時いつでも助けてあげると言ってくれました。

ある日、私はお母さんに私のアメリカにある問題について話しました。私は「継父に悪く扱われるので家に帰りたくない。アメリカでぜんぜん家に帰らないから、家がなくて家族がいらないという気持ちがある」と言いました。その時お母さんは「ここはハルの日本の家よ。帰りたい時帰りなさい。いつでもいいよ。」と言ってくれました。

私がアメリカに帰らなくてはいけない時も、お母さんはまた同じことを言ってくれました。私はこのお母さんに会えて本当によかったです。それにしても本当に親切な家族でした。お母さんとこの家族みんなは、私に家族の価値について教えてくれました。それ以来、私は家族が世界の中で一番大切なものだと思います。

私は今も日本のお母さんと電話やメールでよく話をしています。来年留学する予定なので、また家族みんなに会えるのを楽しみにしています。

中級レベル三位

ケイラ ミンキョン キム

日本は私の友達のような。文化、言語、伝統だけではなく、日本旅行、日本料理それに日本人の友達も大好きだ。特別な理由もなくして日本の圧倒的な魅力の中で生きて来た私は、どうして日本に関心を持っているか、また、私が日本に学んでいる事は何かについて考えてみた事がなかった。

私は父の仕事のためにジャカルタの国際学校に通った。そこでは色々な国の友達と一緒に生活しながらそれぞれの国の習慣や文化を習う機会が多かった。高校では日本語を勉強したので日本人の友達と交わる事も多かったが、その中で一番素晴らしいと思ったのは日本人の「協力する心」だった。

国際学校には毎年 UN の日と呼ばれる祭りが催される。その日は色々な国を代表するクラブが公演をする事になっていた。日本クラブはいつもほかのクラブの公演よりちよつと難しい公演をする事になっていた。私は日本人の友達がたくさんいたからよく日本クラブの練習室に行つて友

達が練習するのを見た。日本クラブは会員が六十人で一番多かったので練習を毎日何時間もしなくてはいいい公演はできなかった。驚いた事に、日本クラブの人達は毎日続く練習に誰も不平を言わなかったし、練習に遅れる人もいなかった。私の韓国クラブではみんな自分の気持ちや不平をはっきり言いすぎるのでよく困っていた。日本人は自分より他の人の気持ちを先に考えて行動するから、時間を充分練習に使えるし、いい練習ができるから苦しくても楽しいのだ。友達が皆明るい顔で、疲れていても「おつかれさま」や「どうもありがとう」と言い合うのを見ても驚いた。皆で協力して出来上がった日本クラブの太鼓と伝統的な踊りはその日のハイライトになった。

お互いを尊重しながら他の人たちと協力するのはなかなかできない事だ。しかし、グループ全体のために努力した私の友達が私は誇らしくかった。この時知った「協力する心」を、私は今いるアカペラグループで生かせると思うと本当にうれい。

<http://www.boston.us.emb-japan.go.jp>

